

[実践報告]

プリント柄を活かしたカラードレスのデザイン

藤 本 和 賀 代**

今回、プリント柄を最大限に活かしたドレス制作に取り組んだ。一般的にプリント柄は刺繍や模様織りに比べ安価なイメージが強いが、それを一新するような、上品で、豪華な印象まで感じられるカラードレスに仕上げることを目的とした。そのため、プリント柄をアピールできるようドレスの中で占める面積の大きいスカート部分に使用し、シンプルなシルエットのデザインにした。また、スカートの派手さに負けないよう、黒地のビスチェはケミカルレースやラインストーンで飾った。さらに、お好みで使用できる豪華なサッシュベルトも制作した。制作したドレスは日本デザイン協会主催のNDKファッションショーにて発表しデザイン賞を受賞した。

キーワード：カラードレス、プリント柄、ファッションショー

1. はじめに

最近、披露宴で花嫁がプリント柄のドレスを身に着けている姿を見かけるようになってきた。

生地に柄を作る手法としては主にプリント、刺繍、織りによるものがある。中でもプリント柄は、安価なイメージが強く、ライフスタイルの特別なシーンであるウエディングに使用されることは少なかったのだが、最近ではそのイメージも変化し多く出回るようになってきた。要因としては、印刷技術の向上による鮮やかな色とそれを活かした奇抜なテキスタイルデザインの台頭がある。

今や世界に誇るデジタル印刷技術を持つと評判が高いのは石川県能美市に拠点を置く小松マテレー株式会社¹⁾である。画期的なデジタルプリントは1,670万色に及ぶ色数、それをコントロールする高度な技術により、これまでにない高い鮮明度とカラーバリエーションを実現できるようになった。合成繊維を中心とする染色加工技術は、世界最高クラスであり、国内外のトップブランドからの支持を得ている。

そして、これを上手く活用したテキスタイルデザインを行った一人に蜷川実花氏の存在がある。同氏は写真家・映画監督として国内外での精力的な活動だけでなく、ファッションブランド「M/mika ninagawa」のディレクションも手掛けている。同ブランドのコレクションの中でウエディングドレスや打掛をも発表している²⁾。同氏の写真や映画作品にも見られる個性的で鮮やかな花柄のプリントが特徴であり、印象に残る作品になっている。また、柄をより引き立てるドレスのシルエットはシンプルなプリンセスラインで今では蜷川ブランドの定番ともなっている。

今回、このようなブライダル業界の動向を受け、大胆で奇抜なプリント柄を最大限に活かしたカラードレスのデザインと制作に取り組むことにした。

なお、本作品は第85回NDKファッションショーにて発表した。NDKファッションショーとは一般社団法人NDK日本デザイン協会が主催するもので、ファッションデザインの総合的研究向上を目的としている。オートクチュール作品の発表の場として1960年(昭和35年)より毎年1回ないし2回、欠かさずショーとコンテストを実施している³⁾⁴⁾。NDKファッションショーに発表することで、クリエーション能力と技術力を磨く機会を得ることができる。参加者は経験豊富な熟練者から多くの貴重な意見をいただけるだけでなくクオリティーの高い作品を間近に見ることができる。時に厳しい意見をいただくがそれらは作品の完成度を上げるうえで貴重なアドバイスである。著者にとってこの作品発表を積み重ねることは自らの技術と知識の向上だけでなくブライダルファッションコースの学生達への技術指導にも役立っている。

2. ドレス企画

2.1 デザイン概要

今回選択した布は、大柄の白黒の市松模様、インパクトのある赤やショッキングピンクの花柄がプリントされたものである。この柄をより引き立てるためには切り替えや付属部品も極力控え、シンプルに仕上げることである。その場合、重要になるのがシルエットである。デザインがシンプルになるほどシルエットの良し悪しははっきり出てしまう。この度のドレスは花柄イメージが強いいため、それに合わせた丸味のある可愛らしいシル

*短期大学部生活科学科

エットが出せるように工夫が必要である。

ボトムスのスカートはウエストに大きなソフトタックプリーツをとったアーチ型のロングシルエットである。また、砂時計の形をイメージしウエストベルトを極太にし、丈は長すぎずヒール先が少し覗く程度が適当と判断した。

次に、トップスのビスチェ部分は、スカート柄の一角である黒で引き締めた。胸元は女性らしさを協調するため大きくあいたVネックラインにした。特にバックスタイルの衿ぐりを大きくくり下げ、よりフォーマル感を出した。また、黒の無地は淋しい印象になりがちである。特に今回の様に派手なスカートとの組み合わせであればなおさらである。そのため、黒地の土台布にはスパンコール刺繍の入った花型のケミカルレースをのせることにした。それでもなお不足を感じ、多数のラインストーンやビジュウを前は肩から胸、後ろは肩から肩甲骨に向けてグラデーション状に施した(図1)。



図1 デザイン画

2.2 ドレスの布と付属

ドレス製作にあたって準備した布、付属等を下記に示す。

(1) ビスチェ

- ・表地 ナイロン・ポリエステル混紡 図2①
(薄手・光沢感あり) 140 cm 幅 50 cm
- ・ケミカルレース (スパンコール付き) 図2②
200 cm (幅 25 cm)
- ・ラインストーン 図2③
- ・コンシールファスナー 1本 (22 cm)
- ・接着芯 薄手伸縮あり 90 cm 幅 30 cm

(2) スカート

- ・表地 ポリエステル 図2④
(薄手・ハリ、光沢感あり) 150 cm 幅 260 cm
- ・コンシールファスナー 1本 22 cm

- ・ベルト芯 厚手 7 cm 幅 70 cm 1本
- ・かぎホック 2組



図2 使用布・附属写真

2.3 パターンメイキング

今回のドレスをショーで着用してくれるモデルの体型は、身長 175 cm バスト 80 cm ウエスト 58 cm 背丈 37 cm である。これらを基に文化式成人女子作図法⁵⁾でパターンを製作した(図3)。

まず、モデルの体型の特徴をつかみ、アピールする点とカバーすべき点を確認した。特徴としては、肩幅が一般女性より広く、首が長い。そのため、ビスチェの肩線幅は細くし過ぎない、細くすることにより肩幅の広さを強調してしまう。また、首が長く首筋から鎖骨へのラインが美しく魅力的であるためデコルテ部分を大きくみせるようにしたい。そこで、デザイン画のイメージを崩さない範囲で首ぐりを大きく開ける工夫をした。

次に、今回のモデル寸法で作成した原型をもとにビスチェのパターンを作成した⁶⁾。原型より胸ぐせダーツを肩へ移動し消す。前後のネックラインを深く練り下げ、女性らしさを強調する。伸縮性のある布のため、パターンのゆとりは最低限とし、極力体にフィットさせた。明きは目立たない脇に設定し、コンシールファスナーを付けた⁷⁾。

続いて、スカート部分は柄をできるだけ綺麗に見せたいので、はぎは脇のみとした。そのためスカート裾幅は布横幅いっぱいにした。ウエストで深いソフトタックをとるがスカート膝あたりでは柄の重なりが無くなるようパニエのふくらみにより広がり分量を加減した。

ウエストベルトの太さは7.0 cmと幅広のため、動きやすさや呼吸のしやすさを考慮しなければならない。ウエストはモデルの寸法より3.0 cm大きくし、更にベルトを上にもむけて0.6 cm広げた。

スカート脇では柄合わせが必要である。大柄の場合、柄が合っていないと目立ってしまう。前、後の脇線の角

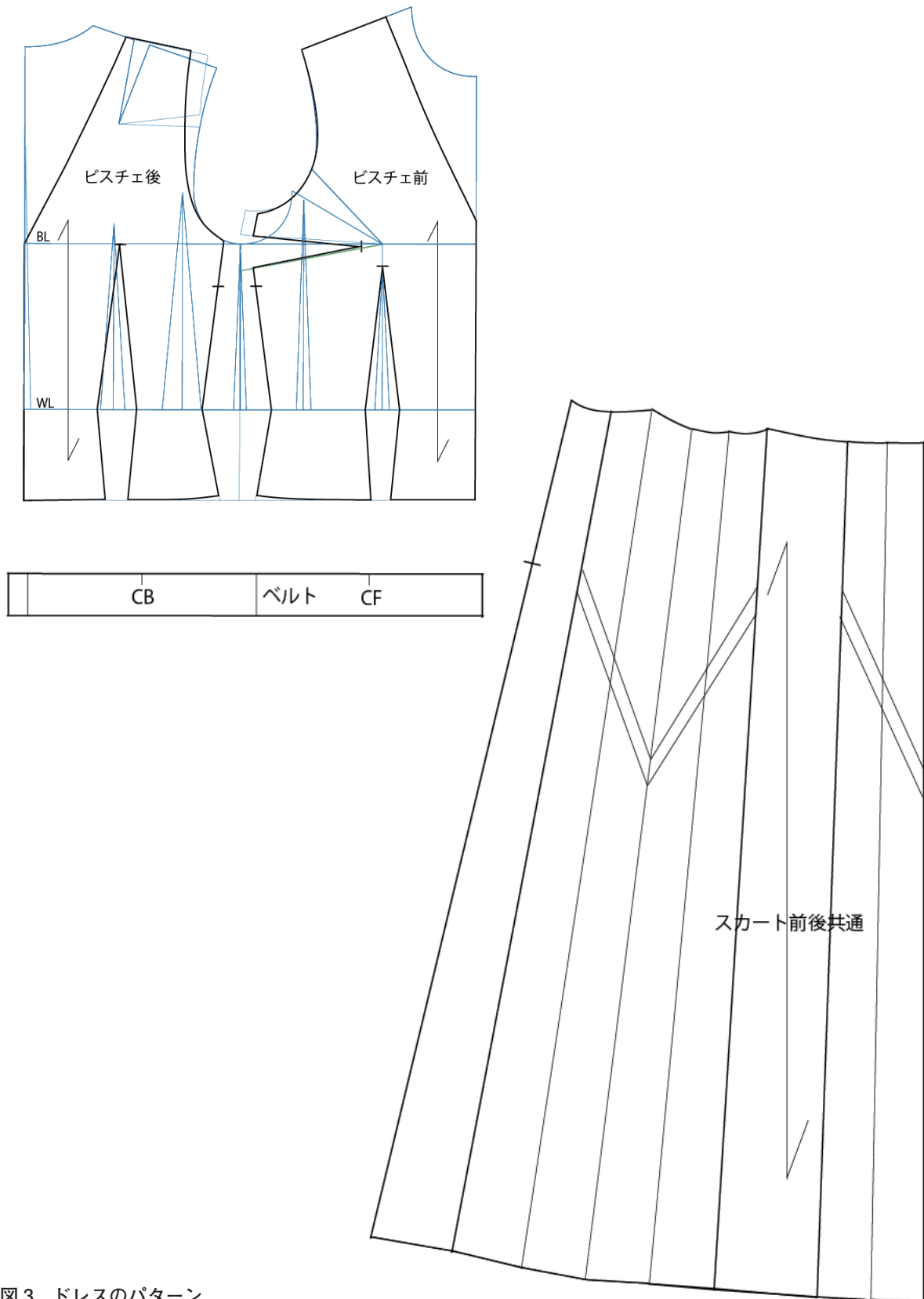


図3 ドレスのパターン
(縮尺 ビスチェ6分の1, スカート8分の1)

度を同様にし、裾まで綺麗に柄が合うようにした。スカートもあきは脇とし、22cm コンシールファスナーを付けた。スカートのソフトタックプリーツはウエストのカーブの角度によって開き方が微妙に変化するためシーチングで組み立てた後、着用予定のパニエを付け、全てのタックの開き具合を確認した。また同様の形状になるようドレーピングの上、パターン修正を行った⁸⁾⁹⁾。さらにデザイン画と見比べスカートが美しいアーチ型のシルエットになっているか、またスカート丈のバランスを確認した。

3. ドレスの制作

3.1 仮縫い・試着・修正

仮縫いとはシーチング（仮縫い用の生地）を使用しデザイン画に忠実に作品を制作することである。この度も着用予定のモデルに合わせて制作し、試着（フィッティング）してもらい、綺麗にモデルの体に合うよう修正を行った（図4）。

フィッティングの結果、一番気になったのはビスチェ片方の肩に大きなしわが出ることである。今回のモデルの利き手である右の肩が大きく下がっており、右のバストから肩、肩甲骨辺りまで布がかなり余っている（図5）。

人間の体型は必ずしも左右対称ではない。スポーツをしていた人などでは利き手が長かったり、利き足が太かったりすることはよくある。



前



後



前



後

図5 ビスチェ修正

図4 仮縫いしたドレスの試着

このような場合、体型にぴったり合わせて修正をしてみようと、かえって体の左右の違いを強調してしまうことがある。修正する時は適度な分量で止める必要がある。そのため、前身頃での修正は最低限として後ろ見頃の肩甲骨の一番高い位置、背中中心側で1.2 cm パターンをたたみ、消すことにした。

さらに、モデルの体に合っていない点の修正を行った。

- ・ウエスト設定の位置が高かったため全体に1.0 cm くり下げた。
- ・袖ぐり後ろ肩甲骨から脇下にかけて詰まり過ぎており、袖ぐりをかま底に向けて0.5～0.7 cm 程度くりを大きくした。
- ・バストポイント位置が高かったため1.0 cm 下げた。

他にも些細な修正が何点かあった。

また、スカート部分ではウエストベルトを全体に1.5 cm 大きくした。ウエストベルトが太いため、本来のウエスト位置より上部で採寸する必要があったと感じた。

3.2 ビスチェ製作

布の印付けはおきじつけでおこなった。見返しに薄手の芯地を貼り、袖ぐり、襟ぐりには伸び止めテープを貼った¹⁰⁾。少しだが布にストレッチ性があったため、糸は伸縮するビスロンを使用して縫製した。

縫いあがった土台のビスチェはボディ(洋裁用人台)に着用させケミカルレースの配置を検討した。ケミカルレースは花のモチーフになっているため、切り離し使用可能である。花の大きさや形に合わせ身頃に止め付ける。上半身はウエストダーツやバストのダーツなど凹凸が多いため、各々を面で捉え面のサイズに合うレースモチーフを選択し、左右対称になるよう丁寧に手で留めていく¹¹⁾¹²⁾。

黒地に黒のレースだが土台生地とは素材が大きく異なり、モチーフにはスパンコール刺繍されているので同化し過ぎず、レースの存在感を感じることができた(図6)。



図6 留め付けたケミカルレース

3.3 スカート製作

布の印付けは直線が多く分かりやすいため要所のみ縫いじ付けをした。

ウエストベルトが幅広のため、真ん中で折れないように増し芯をし、鍵ホックは上下に2個付けにした。

仕上がったビスチェとスカートをボディ(洋裁用人台)に着せ付け上半身に付けるラインストーン、ビジュウの量や位置を検討した。既にスパンコール付きのケミカルレースを全面に付けているので諄くならないよう気を配る必要がある。その為、前身頃は肩の辺りより胸にかけて、後ろ身頃も同様に肩より肩甲骨あたりまでのみラインストーンを付けることにした。大、中、小と大きさを変えバランスを取った(図7)。



図7 ラインストーンの付いたビスチェ

3.4 最終フィッティング

最終フィッティングではモデルにドレスを着用してウォーキングやポーズをとってもらい作品の仕上がりを確認した。

今回、大きな修正が必要な箇所は見あたらなかったが審査員より黒のサッシュベルトまたはウエストリボンをつける提案をいただいた。ウエストにベルトを付けることにより、黒の印象が強いビスチェと赤い花柄のスカートの繋がりが良くなるという。

しかし、これも最終的にはデザイナーの考え方であり、ベルトは付けずメリハリのあるスタイルと考えるか、ベルトを付け伸介により統一感が出たと考えるかは好みである。

そこで急遽、サッシュベルトを試してみることにした。

布には光沢のあるサテン生地を選択し、ビスチェで使用したケミカルレースやラインストーンを付けビスチェとの繋がりを良くするよう配慮した(図9)。

また、ヘアアクセサリーとしてスカートの柄である花に近いイメージのコサージュを用意することにした。

4. NDK ファッションショー

ファッションショーは平成30年9月14日大阪ホテル阪急インターナショナルにて開催された。この日出品された100点近い作品は趣向を凝らした力作ばかりであっ



前



後

図8 仕上がったドレス



図9 サッシュベルト装着

た。デザインアップから始まり、布選び、パターン、縫製、そしてモデルによるフィッティングに何度かの修正を経て完成させた作品である。

また、最終フィッティングからも本番当日まで2度、3度とりハーサルを行い綿密に確認および調整が行われた。モデルはランウェイウォークを行い作品が少しでも映えるようなポージングや歩き方を検討した。フィッターは着用順、装着小物の間違いが起きないように何度も確認した上で本番を迎えた。

今回も、優れた作品を数多く拝見することができた。完全なるオリジナル作品と言える布の染色から手掛けた作品や、服のみならず、帽子、靴、バックまでトータルでデザインし、制作された斬新なスタイル、細かい刺繍が全面に施された豪華なウエディンドレスなど、拘りの詰まった多くの作品を拝見する度、勉強することはまだまだ山のようにあると感じる。また自分の作品に対していただいた貴重なアドバイスはこれからの作品作りの糧とし、今に満足すること無く更に完成度の高い作品制作に努力していきたい。

なお、この度のファッションショーではデザイン賞をいただいた。



図 10 モデルが着用したドレス

参考文献

- 1) 小松マテール株式会社ホームページ,
<https://www.komatsumatere.co.jp/> (最終検索日:
2020/05/15)
- 2) 「M / mika ninagawa」ホームページ,
- 3) 藤本和賀代, ガーデンウエディングにふさわしド
レス制作, 徳島文理大学研究紀要第 96 号, pp101-
108, 2018
- 4) 藤本和賀代, レース素材の透け感を活かしたドレス
制作, 徳島文理大学研究紀要第 98 号, pp99-105,
2019
- 5) 大沼淳, 文化ファッション体系⑥ 服飾造形の基
礎, 学校法人文化出版局, p83-85, 2013
- 6) 中野慶子, 岡本あづさ, 松尾一弘, カスタマイズで
きるウエディング&カラードレス, 学校法人文化出
版局, pp46-49, 2017
- 7) 大沼淳, 文化ファッション体系コーディネートテク
ニックⅡ (商品知識), 学校法人文化出版局, p70-
73, 2010
- 8) 大沼淳, 文化ファッション体系⑥ 服飾造形の基礎,
学校法人文化出版局, p94-96, 2013
- 9) 大沼淳, 文化ファッション体系アパレル生産講座③
立体裁断 基礎編, 学校法人文化出版局, pp129-
138, 2001
- 10) 大沼淳, 文化ファッション体系③ (ブラウス・ワン
ピース), 学校法人文化出版局, pp235-237, 2014
- 11) 大沼淳, 文化ファッション体系⑥ 服飾造形 応用
編Ⅰ (高級素材), 学校法人文化出版局, p100-101,
p108-109, 2013
- 12) 月居良子, 手作りドレスでウエディング, 学校法人
文化出版局, pp68-71, 2004

Color dress design that makes use of the print pattern

Wakayo Fujimoto

Summary

This time, I worked on making dress which is made use of the print pattern maximally. However, print patterns are generally cheaper than embroidery and pattern weaving, we set it a goal to give the color dress an elegant and luxurious impression to renew that image. Therefore, the print pattern was used for the skirt that occupies a large area in the dress so that it can be appealing, and the design was simple silhouette. While, the black bustier was decorated with chemical lace and rhinestones so as not to be inferior to the flashiness of the skirt. In addition, I made a luxurious sash belt that you can use as you like. The produced dress was presented at the NDK fashion show sponsored by the Japan Design Association and won the design award.

Keywords: Color Dress, Print Pattern, Fashion Show